

---

# Fantasy The world

karasu64

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fantasy The world

### 【コード】

N29190

### 【作者名】

karasus64

### 【あらすじ】

普通に過ごしたはずが・・・

何をしても喜ばれず、何をしても無関心。周りからは嫌われ、避けられる・・・

そんな彼にも一緒にいてくれる妹がいた。それが彼の唯一の生きが이었다・・・

だが、そんなある日、妹が交通事故に会い、死んでしまう。

全てに絶望してしまった彼は、一つの願いを想ってしまう・・・

そんな彼の想いと強さの物語・・・

## プロローグ（前書き）

こんにちわ、始めまして！

karasug64です。

処女作です！初めてなので至らない所があると思いますが、読んでくれると幸いです！

では、物語を始めましょう・・・

## プロローグ

神無月聖夜かんなつきせいやは物心ついた時には、もう両親には相手にされず、友達と呼べる人はいなかった。

近づいても

「お前みたいな女遊びに入れてやんないよ！」

「遊びたいなら女同士あそんでろよ！」

なにが原因でこんな状況になったのか分からない。

今なら少し分かるが、小さい頃は我慢して一人で公園のブランコで何もしないでただ、ぽつんと、座っていただけだった。

あの時、俺は男だと言えれば、少しは違っていたのかも知れないし、両親似ていない女顔負けで、さらっとしている黒髪を背中まで伸ばしてたらそれはしょうがないと今なら思うが・・・

少しでも振り向いてもらえるように気を引こうとしたが、何も相手にしてくれない。むしろ嫌われる。

嫌われていく内に人の顔を見るのが嫌になり見られなくなかった。

しかし、妹の神無月冥弥かんなつきめいだけが違かった。

一緒に過ごし、一緒に笑い、一緒に居てくれた。

兄の俺が可愛いと思うし、愛嬌があつて、それでいて優しい・・・  
実際モテているらしく、告白されるとちょいちょい俺に聞かせてくる。

「そうなんだ。」と適当に言うの不機嫌になり怖いときがあるが。

そして、14歳の時妹からの初めてのプレゼントをもらった。

「聖ちゃん、お誕生日おめでとう!」

初めてプレゼントと言うものをもらって内心嬉しかった俺は「ありがとうな。冥弥」と言ってプレゼントを見た。

・・・ん?何だこれ

そこに入ってたのは、ピエロがつけているような、半目は笑っていて、半目は泣いている。

三日月のように大きく口を開けて笑っている仮面だった。

「え、えつと、なんでしようかね・・・?これは?なんか面白い物があるんだけど・・・」

見れば分かるでしょ、と言うように胸を大きく張って言い放った。

「それね、聖ちゃんに合いそうだから買ったの!」

は・・・?なにを言ってるんだ?俺に合いそうだから?いやいや、合うわけないだろ!こんなのもらっても微妙だ・・・

「何で仮面なの?俺こんな趣味無いけど・・・」

冥弥は不安そうに

「前から聖ちゃん、人に顔を見られたくないって言ってたよね!だから買ったんだけど・・・嫌だった?」

それを聞いた瞬間、自分の中の想いにすっぱり何かが入っていた。

「ありがとう・・・一番の宝物になりそうだよ。ホント、ありがとうな。」

自分には冥弥だけ居てくれればよかった。

あれから3年経った寒い冬・・・

「聖ちゃん、これから服買いに一緒に行こうよ！」

「急にどうしたんだ？友達と約束があるんじゃないのか？」  
突然、誘ってくる冥弥。

普段服など買いに行くとしても友達と一緒に言っているはずだ。

「今日はもう聖ちゃんと一緒にいるって決めたの！」

まあ、一緒にどこか出かけるぐらい良いだろうな。

「わかった、じゃあ準備するからちよつと待っていてくれ。」

「待ってるね〜」

それにしても急にどうしたんだろうな・・・

少し違和感を覚えつつ準備した。

準備を終え、駅前に行くことになった2人は昼食を食べてなかった  
ので、食べてから冥弥の行きたい所について行く事にした聖夜は振  
り回されつつも楽しい思いがあった事もあって気づかない内に夕方  
を迎えていた。

今から帰れば丁度夕飯になるか。

「じゃあもうそろそろ帰るか。」

そう言っただけで家に向かっている時、突然冥弥が

「今日は、ありがとね。久しぶりに楽しめたよ！」

そう言っただけで突然感謝され、やっぱり何かあったんだと思い、朝出か

ける前に気になっていた事を聞いてみた。

「朝から気になってたけど、どうしたんだ？今日の冥弥少しおかしいぞ。なんかあったんなら言ってみ？」

立ち止まって、少ししてから振り向いた顔にはさっきまでの笑顔とは違って変わって泣きそうな顔があった。

「どうし、あのね、友達と喧嘩して聖ちゃんの事色々言われたんだ……。無表情で怖いとかさ、女みたいでなんか気持ち悪いってそれでかーってなって口喧嘩しちゃった。」

そう言っただけで泣きそうにながら笑っていた。  
我慢して泣かないようにしていた。

それを聞いた瞬間、シヨックと同時に過去を思い出した……。自分のせいでこんなに嫌な思いをして辛いのにそれでも俺を見捨てない冥弥になんて言えばいいかわからなかった。

それを見て冥弥は何を思ったのか、自分にこう言ってきた。

「でもね、聖ちゃんが私のお兄ちゃんですごく良かったんだよ？勘違いして欲しくないけど、これはほんとだよ！何度も助けてくれるのに、嫌な顔一つもしないでずっとそばに居てくれた。それだけでも、良いんだから……。だからそんな顔しないでよ。まあ少しは他の人と話したりしてほしいけどね。」

自分に笑い、冗談を言いながら言ってきた。

なんでそんな顔出来るとか、自分は居ないほうが良いとか、思っていた気持ちが吹き飛び、こんなに自分の事を考えてくれているのが嬉しいと同時に冥弥を支えないと言う気持ちが同時に出てきて「。

「ありがとうございます。」としか言えなかった。

そして、気づかなかった。

横から車が来ていることを・・・

そして気づけば、目の前にいたはずの冥弥は居なく、残っていたのは大量の赤い何か・・・

・・・何が起きた？それでこの赤いのはなんだ？なんで目の前に居たはずの冥弥はあそこに倒れているんだ？

そこまで考えてから「冥弥！！！！！！」と倒れてる冥弥に走って行った。

「冥弥！なあ・・・おい・・・嘘だろ・・・？目開けてくれる・・・

」  
そこまで言ってから野次馬の誰かが連絡したのか、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「せ・・・いちゃ・・・ん」

「しっかりしろ！！大丈夫だ！今救急車きてるから・・・すぐによくなるから！！」

と言っが、段々と弱々しくなってくるのは見て分かった。

自分の中で居なくなっていくような感覚に陥った聖夜は必死に声をかけていた。

だが、冥夜はもう駄目だと分かったのか自分に向かって笑いながら  
「あはは・・・へんな・・・顔・・・笑っ・・・てよ？そんな顔聖ちゃんには・・・似合わないよ？せっ・・・かく・・・可愛い顔してるのに・・・」

「冗談言ってる場合か！そんなこといって「お・に・・・いちゃん・・・

・  
「っ！」

「おにいちゃ・・・んの妹で・・・良かったよ！」

そういつて笑って自分を見てきた。

そこには死んだ冥夜を抱きしめて泣いている聖夜が居た。

## プロローグ（後書き）

プロローグってこんな長かったっけ・・・？なんか異世界物の物語のはずなのに、異世界に行けないという・・・

なにぶん処女作なので、誤字、脱字があるかもしれませんが、指摘してくれると幸いです！

あとこうすると読みやすいとか、感想とかくれるとうれしいです！次はちゃんと異世界に行くようにします・・・

多分・・・

仮面を被り少年（前書き）

とりあえず、連続投稿で・・・

## 仮面を被り少年

冥夜が死んだ・・・

それは悲しい事だ・・・

でも、いまだに信じられずにまだどこかでぼーっとしているしかなかった。

今日出かけたのがいけなかったのか、それともあのまますぐに家に帰れば冥夜は死なずに住んだのでは？とずっと考えていた。

両親はずっと泣いている。そして「やっぱり聖夜と一緒にいさせるのがいけなかったんだ」「なぜ冥夜がしんでしまっただけで聖夜が生きているの・・・」と二人は居間でずっと話している。

やっぱり俺は居ないほうが良いんだ。

2階に戻り、机を見ると14歳の時にもらった仮面が立てかけてあった。

何度見てもやっぱり俺には似合わないと思っていた仮面が今は自分の気持ちを映しているような気がした・・・

もうこの世界には俺はいらないんだ。そして冥夜がいない世界に俺の居場所ももう無い・・・

冥夜は笑ってと言ったが、到底そんな気なんて起きない。

「冥夜、お前がいないとこんなにきついとはね・・・」  
そうつぶやいてから、目から涙が無意識に出てきた。

もうここには居たくない。もうこんな世界には居たくない。こんな冥夜がいない所にいるぐらいなら・・・

そう思っていて1秒とも1時間とも思えるぐらいぼーっとしていたら

「そんなにこの世界が嫌か？」

急に目の前に綺麗な姿の女がした。

・・・え？誰だ？それに嫌だって・・・

「居たくないんだろう？それは絶望して嫌だと言っているのと同じ。それなら居なくなればいい。ここじゃない別の場所に行けばいいんだ。」

女はそう言って笑っているような気がした。

突然現れて馬鹿にされてるようで、不快に思い今まで溜まっていた怒りのせいで聖夜は叫んだ。

「それでも！どこへ行けばいいんだ！この場所って言ってるのは！この世界で！冥夜が居なくて！自分の事を見てくれる人なんて！この世界にはいないんだ！」

幼い頃から溜まっていたものを吐き出すようにその女に対して叫んだ。

女はさもおかしそうに

「なぜ、この世界にはお前を見てくれる人がいないと思う？いるか

も知れないだろ？それに他人と仲良くしたいならお前も態度などを  
変えたりすればよかったのだ。なぜ、努力をしなかった？なぜ仲良  
くしようとしなかった？少なくともそんな努力などをしなかったお  
前が悪いのだ。」

何も言えなかった。正論を言われるが、否定したかった。

「でも……」それに別の世界なら連れて行ってやってもよいぞ？  
……え？」

聖夜は何を言ってるのか分からなかった。別の世界？どうゆうこと  
だ……？

それを答える前に女が自己紹介をしてきた。

「ああ、申し遅れたな。我はこの世界の創造主であり管理するもの  
である。名はナルクスⅡデイⅡノーヴィスⅡネイランド。長いから  
ナルクスとでも呼べ。」

そういつて長つたらしい？自己紹介をしてきた。

は？……神様ってことか？何を言ってるんだか分からんが聞きた  
いこともあったのでどうでも良かった。

「……じゃあナルクス。この世界から違う世界に行けるのか？そ  
れに誰も俺の事を知らないって事だよな……？」

「何を言っておるのだ？当たり前だろう。まあ良くとしてもこの世  
界よりは不便だが魔法とか使える世界だぞ？」  
と言ってナルクスは笑っていた。

いや、魔法とかどうでも良いんだがな。しかし、良いかもしれない。

「・・・もうこの世界では居場所なんてないし・・・冥夜ももういない。どこに行ってもどうでもいい。」

「なら俺をその世界とやらに連れて行ってくれ。もうどうでもいいんだ・・・こんな所なんて」

ナルクスに言った。

「なら、準備するがよい。後、お主が行く世界は危ない所じゃ。そのため魔力とか色々と無限に使えるようにしてやるし、知識も付けてやる。ワシからの土産だと思いきやありがたく思うのじゃ。」

なんかさつきから上から目線でうざいがそれより準備をしようか。

と言っても、聖夜は基本買わないので必要なのは着替えと冥夜からもらった仮面ぐらいしか持って行く物はなかった。そして、最初で最後のプレゼントだったので肌身離さずするために初めて付ける。

「・・・意外に見やすいな。てつきり全然視界が悪いと思っていたが、これなら普通に付けて過ごせるな。」

「準備できたぞ。」

そういつてナルクスに向かって言った。

「うむ。なら行くかの・・・ってその仮面似合ってるの。まあ仮面を付けるなら素顔は見せない方がよいぞ?」

「なぜだ?」

「ん?その方がカッコいいからの!」

「・・・ナルクスってなんか、その、アホなんだな・・・」

「黙れ」

「怖いよ・・・なんで分かるんだよ。」

「神の力じゃ！ってそんなくだらん事やってないでさっさと行くぞ！」

そういつて何事かつぶやいている。

「なら文句言つな・・・」

聖夜は心の中で両親に別れを告げ、妹にいままでありがとう、これから一人でがんばるよ。と言った瞬間、目の前が真っ暗になった。

そして次に目を開けたら太陽の光が差し込んだ森の中だった。

## 仮面を被り少年（後書き）

ちよつと無理やりな感じがしますが、異世界に行かせました・・・  
ぐだぐだになってしまい申し訳ないですが、色々と指摘してくれる  
と幸いです。

では、次は主人公が頑張ります！

ではでは、良い日になりますように・・・

## 神との協力（前書き）

投稿できる時にしたいなあって思ってるけど、内容が微妙かと・・・

グダグダでも読んでくれると幸いです。

キャラの名前が思いつかないですよー・・・  
誰か教えて！

まあ、物語をはじめましょうか・・・

## 神との協力

「ここは・・・？」

聖夜が目を開けると、太陽が降り注いでる森に立っていた。目の前には大きな湖があり、土が見えるほど透き通っていた。

「ここはミンティロス森林だな。魔物とか盗賊とか居るから、近くの村に住んでる人は近づかんがの・・・でも、木の実とかおいしい物が実っていたりするから、たまに人がいるらしいが周りにはいないな。」

ナルクスの姿は見えないのに頭の中に言葉だけ聞こえてくる。

「そうか・・・ここにはもう俺を知っている人は居ないんだろ？つか、ナルクスの姿が見えないんだがどこにいるんだ？」

「さっき紹介の時に言ったが私があっちの神なのでな。そちらには姿は出せんのだよ。さっきの質問だが、もうお前の知ってる世界ではない。それと、会って早々だが私は少しの間いなくなるぞ？」

ナルクスは別れを告げるために聖夜にそう言った。

「なんでだ？色々助けてくれると思ったんだが・・・」

「あつちの世界からこつちの世界へ来たのだ。少し修正しないといけないだろ？家族の記憶の改ざんとかな。とりあえず、こつちの世界の情報を頭の中に流してやる。それで私が帰ってくるまでの間頑張るのだな。まあ、この森を出るぐらいまでは、見といてやるぞ。」ナルクスはそう言つと、後ろから見られてる気配がした。

「まあ出るまでは助かるけど・・・それにしても誰も知らない場所か。ホントに来たつて言う実感はないけど、何して過ごそう・・・」そして仮面を付けたまま、行く方向だけが頭の中に浮かんでは、消える。

30分ぐらい歩いてる時、悲鳴のような声が聞こえた気がした。

「なんだ？」

「少し言つた所に魔物と少女がいるな。ん？襲われてるのか・・・まあ良いだろう。ほつといてさつさと行くぞ。」ナルクスはそう言つと先へ促している。

「なに言つてんだ！襲われてるなら助けるとか考えるよ！」  
そう言つと、悲鳴が聞こえた方へ走つていった。

.....

「はあ・・・はあ・・・っ！」

ユランニアニラックニスカレットは慣れない森を必死に走ってい

た。

両耳から角を生やし牙をむき出しにした狼型のケロベロスが追いかけてユランを狙っていた。

木々が邪魔をして本来の走りを出せないのか中々、追いつけないでいた。

「なんつでっ……はあっ……こんな所にケロベロスがいるのよっ……！もつと森の奥にいるって……商人から聞いたのにつ！次ぎあつたら思いつきりひっぱたいてやるっ！杖も落としちゃったし、やばいわね……」

そうして愚痴をこぼすと追いつかれないように必死に走った。

そして、逃げ回って森の入り口に出ようとした時

「ヴヴヴヴヴ……！」

目の前にもう一匹のケロベロスが横から出てきた。

「嘘っ……！」

殺される……そう思って立ち止まり追い詰められていく。

目を瞑り、もう駄目だと思って小さく「誰か……助けてよっ……！」と言って誰かに助けられるという都合の良い期待を持ってしまっが諦めと言っ思いが膨れ上がってくる。

「神よ、火の女神よ、フレイファイイング 我の命に従い此処に契約を！神の審判炎！」

目を開けるとそこには、仮面を被り真っ黒なコートを翻した女神が居たと思った。

.....

「案内頼むっ！」

聖夜はそう言うとき森の中を走った。

「神の私にその口を利けるのはお前ぐらいだろうな・・・もうすぐだぞ！それはそうとお前戦うことは出来るのか？」

ナルクスは聖夜に問いかけた。

聖夜は立ち止まり

「・・・そういえば、どうすればいいんだ？俺行っても駄目じゃない！」

「はぁ・・・なら、とりあえず魔法を教えてやる。その前に助けられる場所に向かえ！」

「わかった・・・」

それから少し走って、前と後ろに挟まれている少女がいた。

「いたぞ！・・・どうするんだ？」

「あれは、ケロベロスか・・・そうだな。今から言う言葉を唱えて手を魔物に向かってかざせ。神よ、火の女神よ、我の命に従い此処

に契約を！神の審判炎！」  
フレイファイニング

ナルクスはそう言って、聖夜に教えた。

噛まないか心配だった聖夜だが、口に出すとすらすらと出てくるのに若干驚きつつも唱えた。

「神よ、火の女神よ、私の命に従い此処に契約を！神の審判炎！」  
フレイファイニング

そして手をケロベロスに向かって翳しながら唱えると巨大な炎の嵐が吹き荒れ、ケロベロスは灰になり少女の前に出た……

## 神との協力（後書き）

戦闘ってどうするのか分からないから自分なりに分かりやすく書いたんですが・・・どうでしょう？

色々感想などしてくれると助かります!!

とりあえず今日はここまで・・・

それでは、読んでくれた皆さん・・・

良い夢を・・・

## 少女との出会い（前書き）

こんにちわ！k a r a s u 6 4です！

読んでくれる皆さん遅れてしまってますいません・・・

色々と就職の為にあっちへぶらぶら〜こっちへぶらぶら〜

大変です・・・

ちょっと今回少ないですがすぐにまた投稿します！

それでは物語を始めましょう・・・

## 少女との出会い

「危なかったね・・・大丈夫？」

聖夜は木に寄りかかっている少女に声をかけた。

「誰・・・？」

ユランは助けてもらったが、謎の仮面を付けた聖夜に新たに警戒しつつ、小さくつぶやいた。

「ん・・・気にしなくていいよ。ただ悲鳴聞いて君を助けただけだし。」

聖夜はそう言っただけで森の出口に向かって歩き出そうとした。

「待って！」

ユランはそう叫んで、声をかけた。

「何？」

「助けてもらってなんだけど、誰なの？見たことも無い服装だし・・・  
なにより怪しいわ。その仮面。」

「それは・・・（ナルクス、なんて言えばいい？）」

「そんなの知るか。自分でなんとかしろ。ってか私は元の世界に戻るから。あ、それと、お前に能力を付加しといたから。無制限で出せる魔力と、創造、錬金、神に等しいほどの肉体を付加しといたぞ。とりあえず魔法、創造、錬金は想像して手を前に出せば出せるし、肉体もよっぽどの事じゃないと傷かん。んじゃ、後は頑張れよ。」

神って意外に無責任だなと心の中で思いつつ、なんて答えるか考えた。

聖夜がなんて言おうか迷っているのをユランは言いにくいのかと思っただのか

「まあ、それは後で良いわ。あなた、私の屋敷に来てよ！お礼したいし・・・あ、自己紹介がまだだったわよね？私はユランニアラックスカーレット。よろしくね！」  
そう言っって手を差し出した。

聖夜は握手をしながら

「俺は・・・聖夜。神無月聖夜。色々な所を見ながら旅をしてる。」

これが2人の出会いの始まりだった・・・

## 少女との出会い（後書き）

本当に短くて申し訳ないです。

色々考えてて、キャラの設定がいまだにどうしようか悩んでいます。

とりあえず助言を友達にされつつ、ダメダメな脳をフルに使って書いています！色々と感想などを待っているので良かったらお願いします。

それでは皆さん、また会いましょう・・・

## 貴族、ユラン（前書き）

結構遅れてしまいすいません。言い訳はあとがきに書かせてください！

それでは物語を始めましょう・・・

## 貴族、ユラン

聖夜「ちょっと質問していい？」

聖夜「ここはどこかナルクスに全く聞いておらず、能力もどの程度かも聞いていないので、まず此処はどこなのかをユランから色々情報を仕入れようとした。」

ユラン「何？あ、もう少ししたらスカーレットに着くわよー！」

聖夜「ごめん、俺まだここら辺のこと知らなくて教えて欲しいんだけど、良いかな？」

ユラン「別に良いわよ。でも何から分からないのかしら？」

聖夜「そうだな・・・まずは、此処がなんて名前なのかすら分からないって言えば良いかな？」

ユラン「そこからの・・・？あなたどこから来たの？」

聖夜「日本って場所から来たんだけど・・・（分かる訳無いか）」

聖夜はそう言った後に此処が異世界なんだったと思いだし言った事

を少し後悔した。

ユラン「ニホン・・・知らない場所ね。ここからどうやって行けばそこに行けるの？」

聖夜「いや・・・ごめん。遠い所が分かんないと思う。まあだから此処がどこか教えてくれたりすると助かるんだが。」

ユラン「ふーん。まあ良いけど。私の領地はアストリアス王国が治めてる所で、名前はスカーレットって言うの。」

聖夜「私の領地って言ってたけどユランってどこかの姫とかなの？」

ユラン「あはは！私が姫なわけ無いでしょ。面白いわね、あなた。そういえば、言ってなかったね。スカーレットを治めている貴族だけど堅苦しいのは、嫌だから気にしないで良いし、助けてくれたし、だから仲良くしてね！」

聖夜「なるほどね・・・色々知らないから教えてくれると嬉しいよ。こちらこそよろしく。」

ユラン「って言うか、その仮面取らないの？なんか辛気臭いわよっ！」

ユランはそう言って聖夜をからかうように言った。

聖夜「別に良いだろ・・・俺は自分の顔が嫌いなんだよ。」

聖夜は少し仮面に触れられて少し自分の過去を思い出しつつそう答えた。

ユラン「あ・・・ごめん。ただ、顔を見たこと無いから、ちょっとからかっただけなの・・・怒らないで・・・」

ユランは街道を歩きながら思いつめたような表情で答えた。

聖夜「あ、謝らなくて良いよ。でも、自分の顔を見て仲良くしてくれる奴なんて1人しかいなかったし・・・それに少し怖いんだ。ユランが仲良くしてくれなくなるとか考えるとね・・・」

聖夜は自分を大切にしてくれた人を思い出し、目の前で死んでいった、たった一人の妹、冥弥を思い出しながらそうつぶやいた。

ユランは少し呆然としたあと、なんでそんな事を言うのか分からないというような顔をしながら聖夜を見た。

ユラン「どうしてそう思ったのかは、知らないけど・・・私はいなくなったりしないよ。だからもう仮面の事は言わないから、そんなこと思わないでよ・・・」

聖夜「……」

聖夜はユランがそう言いながら笑いかけてきたことに驚いた。

そして妹の冥弥に似ているはずもないのに面影が見えた。

そして少し重い空気になり、お互い喋らないで歩いてると、前に大きな屋敷が見えた。

ユラン「着いたわよ！……ようこそ、私のお家へ！」

## 貴族、ユラン（後書き）

1週間放置してしまい、まずは申し訳ありませんでした。

色々就活をされていて家に帰ってもすぐに寝てしまうという生活でなかなか書けませんでした。

たぶんこれからも遅れてしまいますが、1週間に1回のペースで書くようにしますのでよろしくお願いします！

あと、ちょっと、文章の書き方も変えました。色々分りにくい事など、誤字、脱字がありましたら、連絡を待っています。

それではまたお会いしましょう・・・

これが家・・・？（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません。

これが家……？

聖夜「ここが……」

聖夜が想像していた家とは想像できないほど大きかった。これが貴族の家だと思えなかった。周りは3メートルほどの高い柵で端が見えないほど囲まれていた。外から見た邸は、完璧に城だった。

ユラン「一応こちら辺でも少し大きい程度だけだね！とりあえず中に入ろうよ！」

そうやってユランはさっさと中に入っていった。

聖夜「この王国の城はどのぐらいの高さなんだ……」

考えても仕方ないか……  
とりあえず挨拶はちゃんとしないと。

メイド、執事「……」お帰りなさいませ、お嬢様！「……」  
中に入ったとたん、大声でもないのに響いて聞こえてきた。

聖夜は、少し気後れしながらユランについて行く。

ユラン「ただいま。ダイン、お父様は？」

ダイン「旦那様は、広間にいらっしやいます。」

ユラン「そう、着替えてから行くから。聖夜を客室に連れて行ってあげて！準備したら向かうから。聖夜、ごめんね！着替えたならそっちに行くから！」

聖夜「ん、分かった。」

ダイン「かしこまりました。」

ユランは執事と呼ばれた人と聖夜にそう言ってさっさと自分の部屋の方に歩いていった。

ダイン「私、スカーレット家に仕えているダインと申します。聖夜様で宜しかったですね？こちらでございます。」

聖夜「神無月聖夜です。よろしく願います。」

ダインは名前を聞き、仮面を付けていることに全く気にしていないすました顔をしながら無駄の無い動きで先導した。

聖夜は後ろから付いていきながら、詳しい情報をどう聞くのか考えていたら目的の所についたのか、

ダイン「こちらの部屋でお待ちください。」

そう言つて頭を下げ、中に入るのを確認したら元来た道を歩いていった。

聖夜「広すぎだろ・・・ここで待つのか・・・？」

聖夜が案内された部屋は、広く、ベットなど皺一つなく、机、ソファーなど、この部屋だけで生活出来るほど整っていた。

そして、30分ほど待っているとノックされてから、ユランが入ってきた。

これが家・・・？（後書き）

中途半端ですいません・・・

それと前回、週1ペースで書くといったのに遅れてしまい申し訳ありませんでした。

就職が始まって寮生活になってしまったので、ここ2週間更新出来なく、久しぶりに実家に帰ってきました。

これからは不定期かつ、キャラが確定しないまま書くかも知れないので、未永く見守ってくれると嬉しいです。

## 報告と謝罪

少ない方ですが、お気に入り登録してくれている方に言います。

中途半端になってしまったんですが、この小説を打ち切りにさせてもらいます……

本当にすいません。

言い訳と言うわけではないんですが、就職が決まったんですね。これがびっくりして

そうなると思う時間も取れないし、読んでくれる人もいないからいつその事打ち切りにしようと考え報告と同時に謝罪させてください。

申し訳ありません。

最低半年は忙しくて他の作者様の小説を読むぐらいしか、時間取れないだろうなと……

時間あるだろそれって思ってる方

すいません。マジそれ以外時間ないんです。

自衛隊なんですよ？就職先 これマジです。

なので最低半年は忙しくてきついだらうという軽い考えですが、それ以上だと思ったり、思わなかったり・・・

でも、仕事の時間が取れることになったら、他の小説を書こうかなと・・・

まあ、他の作者様の影響で、リリカルか、恋姫か、ネギ魔か・・・

はたまたマガジンの「エデンの檻」もいいなって・・・

あれなんです。好きなんです。生き残り系が・・・

探しても書いてる方いないからいつそのこと、誰かのリクエストさえあればそれを見て、読んで、考えて執筆しようかと思ってたり・・・

ええ、優柔不断なんですよ・・・

でもお気に入り登録してくれている方がいて自分的にはありがたいのですが、  
ございます！って感じなんです。

結構趣味で書いてるのでメッセとかで駄目出しされたりするとめっ  
つつっさ落ち込んだりしますが、少し時間経つとそれなら読まない  
でくださいってこっちから願ったりしますがね。 逆切れですが

まあ打ち切りですが、これと呼んでくれた方

書き方が変でなければ、また執筆したいと思いますので

その時はよろしくお願いします。

それと、ここで書くのも変ですが、リクエストがあればメッセージでもいいので送ってください。

色々設定を考えた後返信させてもらい、評価をお願いしたいと思いますので

長々とすいませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2919o/>

---

Fantasy The world

2011年3月3日22時09分発行